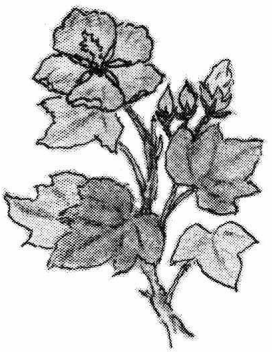
歳月

細井琴句集

歳月

細井　琴句集



昭和六十三年十二月二十五日発行
俳句作家連盟　叢書No.3

句集　歳月

著者　細井琴
〒278千葉県野田市堤台四三八—八七
電話　〇四七一—二四—三三七九

発行人　武田光弘
発行所　俳句作家連盟事務局
〒486春日井市六軒屋町松山四〇—四
電話　〇五六八—八一—六六一二
振替　名古屋　五—四五五七五
印刷　堀之内印刷所

《非売品》

目次

句集『歳月』に思うに……武田光弘
春の部……9
夏の部……37
秋の部……61
冬の部……85
短歌……112
あとがき……116
書・カット……細井琴

句集『歳月』に思う

武田光弘

四児を抱えた戦争未亡人、細井琴さんの生き抜いてきた足跡の句集である。戦争は勝ち負けにかかわらず、いつも多数の未亡人という犠牲者を作り、悲惨を大きく深くする。彼女たちの大方は若く、それぞれ遺児を抱え、戦死した夫の人生よりもはるかに長い、苦しい道程の人生を歩まねばならぬ責めを負わされる。

私の親戚にも新婚早々、戦争未亡人になり、再婚もせずに、父を知らぬ女児を育て上げ、立派に嫁がした叔母がおり、ほか二人の戦争未亡人の叔母は再婚したものの、それぞれ遺児を育てて結婚させている。こうした例は今日の日本には数多いと思う。遺児を抱えていることが、かえって彼女たちの生きる支えであり、励みであったことはたしかであろう。

とにかく女はしたたかである。殊に琴さんのように、戦前の教育を受けた女性は、大和撫子と言われたほどに道義的であり、貞節であり、芯が強かった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しかし、四人もの子供を女手ひとつで育てるということは、さぞかし言語に絶する苦労のいることであったと思う。ところが、そうした生活苦、精神苦の中にありながらも歌心を湧かせてきたということは、琴さんの資質によるものだろうが、歌心は、更に生きる支えを強く太くしたことであろう。

短歌から俳句に転進した人は多いが、彼女もその一人である。「あとがき」で、なかなか短歌性から離れられずに悩んだと書いているが、表現方法が全く異るのだから仕方がない。

・母さんよ百まで生きてという子らの
　　まなざし泛べきょうも働く

・疲れ帰るわが足音に耳さとく
　　ぱっと灯ともる寒き窓辺に

・亡き夫よ子は大学に進みたり
　　今ひと息を力と加護を

胸を打つ琴さんの短歌であるが、俳句になっても内包するものは依然として変ってはいない。むしろ、俳句表現の凝縮性、省略性、余白性、相関性、緊張性、絶対性などにより、彼女の抒情質が増幅されたように思われる。

句集『歳月』は春、夏、秋、冬ときちんと四季の句によって仕分けられてお

り、このあたりに、琴さんの生をいつもしっとりと包みこんだ季節に対する並並ならぬ心根を感じるのである。たとえば、母性を詠んでも、

おぼろ夜の星をひろいに子とあるく
長病める娘を離れきて星おぼろ
草笛を父と呼びし子父になる
母の日のふだん着のまま娘のそばに
赤子みせに娘が来てへやは新緑に
肩さする娘とぬくもりて冬灯

のように、いかにも付け加え申し候の季語でなく、どの季語もふんわりとフレーズを抱きしめ、有機的な機能を果たし、詩情を籠らせている。

子らの父征きしままなる夏が来る
征きしままの足音でくる夏祭り
娘のよこがおに夫の面影ふうりん澄む
敗戦忌おんなにいくさ残りけり
こおろぎや世に生き別れ死に別れ
滅多には泣かぬ母泣く敗戦日

勤労と子育てに追われる毎日の暮らしに、ともすれば心の端に寄りがちな亡

夫のこと、あの戦争のことが、夏が来ると胸いっぱいに蘇り、あふれる。どうしようもない遠く過ぎ去った悪夢のようなことだが、琴さんには一生涯風化しない哀しさ、怒りの団塊としてひそむ。夫恋の情は、〈娘のよこがおに夫の面影〉をみるとき、「あゝ夫は子の中に生きている」という認識にすぐ繋がり、一層のせつなさを私にも覚えさせてならない。

別れとはうしろの匂う沈丁花
菜の花や誰も待たない故郷がある
突っ張り生きてふっと泣きけりつゆ晴間
死に絶えし夏野に何をふやしに来る
梅を干すおんなの余生干すごとく
唐きび焼けば父のふるさと母のふるさと
あさがおの端破れそうで女のようで
あさがおへ曙うつりゆく刻
わが秋思木の葉のいろとなりにけり
ものなべて凍てやわらかなる夕餉
逃げ場なきおんなの齢年暮るる
初雪や消えてわれのみ残りけり

旧正は遠くなりたりちちとはは
除夜の鐘一つはわれの我を打てり

琴さんは、きっと生きとし生ける物の揺蕩(たゆた)う、その時折の季節感情を大事にして懸命に働き、子を育て、あるときは、その季語の葎に、母なる自然の胸に忍び泣き、自責し、郷愁し、亡き父母を想い、今は母たるはずの己れの心音の千々たる乱れをひそかに鎮めてきたのではなかろうか。それはそのまま、自然の風土の中に在る大いなる母を認識し、彼女の生命感情を次第にゆたかにさせてきたことであろう。

草いきれわたしは青いわらべとなる
画いてるときも児の背は伸びる春の雲
肩叩く童の掌育てる青葉風

また、教師としての琴さんの児童とのふれ合いには、吾児を視る慈みの眼差しがあって、この人の純情さを今更のように思う。

写経して初音そこからもらいけり
許すことは許されること東風匂う
梅一りんこの世のそとで咲いている
髪洗いては尼寺を遠くせり

つづれさせかたさせ母は世を隔つ
みんな散るから散ること考えてるもみじ

夫の戦死以後、供養の中で萌えだした仏心は、齢増すごとに琴さんの中にひろがり、有髪の尼僧の行き方に近くなってゆき、

寒の水ごくんとみんなゆるす齢
ぼたん雪あなたも菩薩わたしも菩薩

に至って極致の様相を示してくる。完全に達観した俳句であり、絶唱であると思う。哀しさも、怒りも、今は彼岸のかがやきの中に溶けて、その陰影すらない。長い茨の道を歩いて来た大正のおんな、細井琴は菩薩に化したのだ。

そして、戦争未亡人としての四十数年の歳月の果て、琴さんは、

歳月や言葉なくしてこおろぎとなる

と、人間界を超え、大自然の中の花鳥と仲間になったのだ。なんとゆう悟りにも似た晩年の超脱な心境なんだろう。

句集の題名を『歳月』とした琴さんの心を思うとき、歳月は彼女にとっては〝おんなの歴史〟という感慨がしてならない。

終りに、私のハード・スケジュールのため、八月に予定していたこの句集の発刊がすっかり遅れてしまい、深くおわび申しあげます。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

春

ものの芽や夜はわがどこかちぢまりぬ

むさしののみどりこぼれ娘(こ)から新茶

母なる山が運ぶやさしい春彼岸

ふるさとは椿落つとこ上州路

写経して初音そこからもらいけり

別れとはうしろの匂う沈丁花

死に絶えて菜の花畑いちまいに

おぼろ夜の星をひろいに子とあるく

あの師この師逝きて歳時記霞むかな

日の神の掌もてほぐるる白木蓮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com